



新バビロニアの王ネブカドネツアル(左図)によりエルサレムは陥落(597BC)し、ユダ王国は滅亡しました。王族、貴族、祭司、長老など、主だった民がバビロンへ捕囚として連行されました。約 60 年を経て、今度はペルシャ王キュロス(右図)が新バビロニアを滅亡(539BC)させます。そして、キュロスはユダ民族を始め、すべての捕囚民の故郷への帰還を認めるのです。



イザヤ書 40 章～55 章は、このバビロンからの帰還に際し、イザヤを敬愛する無名の預言者・第二イザヤによって記されたものとされています。冒頭の「**慰めよ、わたしの民を慰めよ**と **あなたたちの神は言われる**」(40:1)はヘンデルの<メサイア>の最初の叙唱、慈しみに溢れる神の声です。続いて「**山と丘は身を低くせよ。険しい道は平らに、狭い道は広い谷となれ**」と応答する大地の姿が堂々たるアリアで、「**主の栄光がこうして現れるのを肉なる者は共に見る**」と救われた者の喜びが合唱となって、表現されています。私は何度メサイアを聞いて感動したことでしょう。自由とされ、なお恵みをもって、慰め、憐れんでくださる神を賛美するイザヤの言葉を歌うことができるのは本当に幸いです。



イザヤ ラファエロ

イザヤが**主に贖われた人々は帰ってくる**(35:10)と記したように、「預言の成就」となりました。東からふさわしい人であるキュロスを用いたのは神の計画であると言います。**このことを起こし、成し遂げたのは誰か。それは、主なるわたし。初めから世々の人呼び出すもの初めであり、後の代と共にいるもの**(41:4)創造の初めから計画をもって、歴史を導き、民を贖う主であったと告げます。

第二イザヤは「**神の審判**」について最初に一度だけ短く告げていますが、その内容は驚くべきものです。贖われた人々がすべきことは、まず「**神のもとに来て静まる。互いに近づいて裁きを行う。助け合い、互いに励まし声をかける**」ということです。要約すれば、「**愛し合いなさい**」ということです。神はこの愛、良い知らせを伝える者を遣わそうとしているのに、民は悟らないと嘆いてもいます。

続いて、「**主の僕**」について言及が始まるのです。モーセを筆頭に神に忠実であった人々は主の僕と言われています。神が遣わし、主が油を注がれた僕の上には神の霊がある。その一人として、解放者キュロスの名をあげています。キュロスについて、その偉業を称えています。が、**わたしの僕ヤコブのために／わたしの選んだイスラエルのために／わたしはあなたの名を呼び、称号を与えたが／あなたは知らなかった。わたしが主、ほかにはいない。わたしをおいて神はない。わたしはあなたに力を与えたが／あなたは知らなかった。**(45:4)と、キュロスは信仰を持っていないことをも記しているのです。キュロスは主の僕、主の使者として用いられましたが、主の名を知らなかった。偶像に頼る愚かさ、虚しさを次々に記しています。

そして、主の名を呼んだ一人の人、アブラハムを神が選び愛し、最初から導いてきたと言います。それがイスラエルであり、真の主の僕であるとしています。53 章に「**主の僕の苦難と死**」が記されています。捕囚の地で、主を待ち望みつつ、貧しく、やつれ、苦しみ、ついに命を取られても、満足した人がいたのです。**わたしの僕は、多くの人が正しい者とされるために彼らの罪を自ら負った**(53:11)とあるように、主の僕の使命は「**取り成す者**」であることです。この箇所はイエス様の生涯と重なるのです。真の主の僕にはもう一つの使命があります。それは「**伝道**」です。捕囚とされ、世界に散らされたイスラエルは世界の民に主の証人となるよう、神に **新しいこと**(48:6b) を命じられるのです。

今、あなたは知らなかった国に呼びかける。あなたを知らなかった国は／あなたのもとに馳せ参じるであろう。あなたの神である主／あなたに輝きを与えられる／イスラエルの聖なる神のゆえに。(55:5)